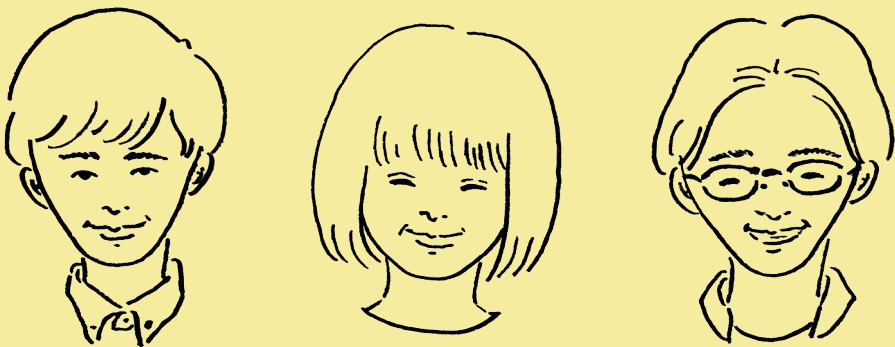


# 人と向きあう 仕事をしている 7人の先輩



静岡県立大学 平成 30 年度教員特別研究  
「静岡県立大学を卒業した対人支援者のキャリアと  
その原点：対人支援者のふ卵器としての地方大学」

---

## 本書について

---

“ 静岡県立大学の卒業生には、北海道から大阪まで全国  
で、人と向き合う仕事に就いている人たちがいます。 ”

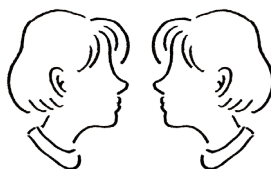
本書は、そんな卒業生7人にインタビューし、どんな学生生活を送ったか、どんな経緯で今の仕事に就いたのか、仕事を選ぶ際に何を大切にしているか、どんな価値観を大切にしているかなどをまとめたものです。インタビューの最後には、一人ひとりから、在学生に向けたメッセージも収録されています。

在学生の皆さんには、自分の人生が多様な可能性に向かって開かれていることを、彼らの話から感じ取ってもらえればと思います。読んでいただければわかりますが、7人は県大の大学生活から大きな影響を受けています。



彼らの言葉は、学生生活を真剣に生きる意味に満ちています。先輩の言葉に触れて、ぜひ、皆さん一人ひとりが、自らの人生の意味を考え、それを生かそうとする道を選んでいただければ嬉しいです。

本インタビューは、同じく本学卒業生で、現在は、スウェーデンの若者政策の専門家として活躍している、両角達平さん(2012年卒)が行いました。両角さんは、7人の友人として、一人一人の思いを丁寧に引き出してくれました。



では、7人の先輩に出会いましょう。

---

## 「人と向き合う」仕事をしている、7人の先輩

---

### 山本晃史（やまもと・あきふみ）

認定 NPO 法人カタリバ文京区青少年プラザ b-lab 職員。1990 年愛知県生まれ。2014 年静岡県立大学国際関係学部国際関係学科卒。静岡学生 NGO あおい、YEC(若者エンパワメント委員会)、DD、就労支援ボランティアにて活動。在学中にフィンランドのユースセンターと関西の学生 NPO である BrainHumanity でインターンを経験。卒業後は、東京都杉並区交流協会に勤めながら一般団法人 ISP に参画。2016 年には一般社団法人 ISP 代表理事に就任。2018 年から現職へ転職。



### 佐藤志保（さとう・しほ）

NPO 法人 NEWVERY 職員。1990 年兵庫県生まれ。2013 年静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科卒。POC、YEC(若者エンパワメント委員会)、DD、就労支援ボランティアにて活動。当時の興味を中心は、ワークショップ、ファシリテーション、広告・デザイン。IT 系商社、広告制作会社を経て、2017 年より現職。大学生向け学生寮「チェルシーハウス」運営、学生寮・学生マンション等のコミュニティ運営支援を担当。



### 鈴木平（すずき・たいら）

NPO 法人 TEDIC 常務理事。1987 年静岡県生まれ。2011 年静岡県立大学国際関係学部国際関係学科卒。環境サークル CO-CO、キャリア形成情報誌 &YOU、YEC(若者エンパワメント委員会)、DD にて活動。大学卒業後、株式会社ワークスアプリケーションに就職し 3 年間営業とコンサルタントに従事。2014 年より公益社団法人 Chance for Children の仙台事務局にて勤務。2018 年より宮城大学大学院事業構想研究科にて NPO やボランティアに関して研究を行いながら、TEDIC に転職し、組織開発、事業、ボランティアプログラムの設計等を行う。



## 田野夏子（たの・なつこ）

一般社団法人キャリアブリッジ職員・高校事業コーディネーター。1989年三重県生まれ。2013年静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科卒。環境サークルCO-CO、DDにて活動。卒業後は和歌山県の社会福祉法人一麦会麦の郷で働く。2014年より現職。高校内居場所、就労相談、事業所開拓等従事。



## 渡辺眞子（わたなべ・まこ）

NPO法人HELLOlife職員・施策マネジメント室プログラム開発ディレクター。1992年岐阜県生まれ。2015年静岡県立大学国際関係学部国際関係学科卒。静岡学生NGOあおい、DD、就労支援ボランティアにて活動。在学中に、生活困窮者支援に取り組む法人にてインターンシップを経験。卒業後、大阪にて就業支援を行っているNPO法人HELLOlifeに新卒で入社。事業・プログラム企画開発～運営までを担当。



## 若林勇太（わかばやし・ゆうた）

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会札幌市苗穂児童会主任指導員。1989年静岡県生まれ。2013年静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科卒。YEC(若者エンパワメント委員会)にて活動。在学中に、イギリスのユースセンターでインターン。卒業後は、(公財)さっぽろ青少年女性活動協会に就職し、Youth+豊平(札幌市豊平若者活動センター)主任指導員を経て現職。



## 湯浅雄偉（ゆあさ・ゆうい）

NPO法人コミュニティワーク研究実践センター月形事業所にて事業主任・主任相談員。1988年群馬県生まれ。DreamSeeds、就労支援ボランティア、DD、YEC(若者エンパワメント委員会)などで活動。卒業後、「若者の自立」を研究テーマとして北海道大学大学院教育学院を修了。在学中から、月形町において若者支援実践と地域づくりが呼応し合う実践を模索している。職場では生活困窮者自立相談支援事業において主任相談員や、美唄市における生活保護受給者の仕事おこしに邁進する。ほか、札幌学院大学非常勤講師、シチズンシップ共育企画フェローを務める。



---

## インタビュー I : 山本晃史 認定 NPO 法人カタリバ b-lab

---

### —どのような価値を大切にしていますか？

キーワードは「アクティブ・シティズンシップ」です。意味は「積極的市民性」で、普通に暮らしている人たちが、身の回りで、大小は様々あれど、ちょっと違和感を感じるなどか変えたいと思ったことに対して、それを「どうせできないから」と諦めるのではなくて、ちょっと声に出してみたり周りの人を誘ったりしながら、動いていくことです。そういう人がたくさんいる状態を作りたいと思っています。また、その人がやりたいことを本当にやれて輝いていることが大事だと思います。失敗でも成功でも人が輝いているところ、何かを乗り越えてやりきったとか、いい笑顔をしているところに一緒にいることに幸せを感じます。

### 授業で言葉を獲得して、それを確認したのがサークル活動

#### —大学での学生生活は、あなたにどのような影響を与えましたか？

今の自分の価値観や考え方が大きく変わり、自分のミッションを見つけることができたのはサークル活動と人権問題の授業です。自分のミッションとは、自分にとっての大事な価値観であり、「自分が何をやる人なのか」「何をしたいのか」ということです。それが、アクティブ・シティズンシップとエンパワメントです。

人権問題の授業では、大事な言葉に出会えました。気になった言葉を見つけたら、言葉を理解するために情報収集をしたり本を読んだりしました。そうやって自分の納得する意味に落ちていきました。それを再確認できたのがサークル活動の現場でした。

アクティブ・シティズンシップという価値観は、学生時代に休学してインターンをしたフィンランドの若者の余暇施設から来ています。フィンランドのユースワークの目的の中には、アクティブ・シティズンシップがあります。その言葉を知り、その意味を獲得していきました。エンパワメントという価値観は、「私たちには、自分で思っているより能力がある」というスウェーデンの中学校の教科書『あなた自身の社会』で紹介されていた言葉です。高校時代に『童話物語』の「誰だって自分が思っているよりかはすごい人間だよ」という言葉に出会っていて、そのときからこの価値観に惹かれていました。その言葉がより大事なと感じたのは、学生 NGO あおいや YEC の活動で、頑張っている中高生と出会い、かかわり始めてからでした。

#### —入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

入学したときは、将来は NGO 職員になろうと思っていたので、静岡学生 NGO あおいに入りました。同時に、入学してすぐに YEC の先輩に声をかけられ、立ち上げに携わりました。大学 1 年生の後期にあおいの活動で、初めて高校生とかかわることになりました。中高生に伴走することに喜びを見出して、一緒にいたいなと思い高校の教師になろうと思いました。ただし、自分が先生になり、クラスをまとめる自信はありませんでした。大学 2 年生になって、YEC の活動で中高生と関わるようになり、学校教育と学校外教育の 2 つがあることを知り、学校外教育の担い手としてのユースワークを進路として考え始めました。

そこで、大学を休学してフィンランドのユースセンターヘインターンシップをしに行きました。帰ってきてからの 1 年間は、学生団体活性化委員会 DD をやりながら、地域づくりをしていました。その中で、ファシリテーターという生き方を知り、その道も考え始めました。東京都杉並区の一般社団法人 ISP の方に声をかけられて、2014 年に杉並区交流協会に入職して、一般社団法人 ISP に参画し、ファシリテーターとしての経験を積みました。

—その後、就いた仕事には、どのような経緯で就きましたか。その際にどのようなことを大切にしていきましたか？

その後、一般団法人 ISP の代表を引き継ぎ、杉並区で中間支援に取り組むことになりました。しかし、中間支援を仕事としてすることの難しさを知り、組織を大きくする困難に直面しました。ISP は多くの世代とかかわっていたので、中間支援の対象がイメージできず、改めて誰と向き合いたいかを見つめ直しました。

そこで、若者を中心にしたい、若者の拠点としてのユースセンターを作りたいと思い、そんな未来は楽しいと思いました。ユースセンターを作りたいと、ユースワークの先輩に相談したら、まずは現場で力をつけたほうが良いとアドバイスをいただき、2018 年から認定 NPO 法人カタリバの b-lab (ユースセンター) に勤めることになりました。今は、ユースワークの現場に入りながら、楽しさと葛藤を日々感じています。

## 大事なのは「主語が誰か」ということ

—仕事を選ぶ上で大切にしたいことは何ですか。また仕事をする上で大切にしていることは何ですか？

収入の優先順位は低いです。収入よりも、自分のミッションとの合致を大切にしてきました。自分が「誰」を大事にしたいのか、どういう先のビジョンを持つかを考えて、転職してきました。

仕事で大切にしていることは「主語が誰か」です。その場で前に立つ際に、適切な人が活躍できるように意識しないと、自分が成果を上げたいからと出しゃばって、その人から何かを奪ってしまうことになるからです。

子ども・若者とかかわる時には、子ども・若者の参加がかたちだけの「お飾り参加」にならないように、チェックをして仕事をしています。その人がやりたいことを本当にやれて輝いていることが大事で、やりたいことが出てきた時の目の輝きが大切なのです。



### 在学生へのメッセージ

#### 自分のミッションを大学という宝箱からみつけよう

在学中に「自分のミッション」を見つけてください。大学はサークルだけではないと思いますが、いろんなところに顔を出して手を出すことは重要です。その中で、自分で大切にしたいものが何なのかを卒業までに見つけてほしいです。津富教授が「大学は宝箱のようなものです。自分が宝だと思うものを取ってみて違ったと思ったら元に戻せばいい。こんなことを繰り返すのが大学なのだよ」という話をしてくれました。そうしていくうちに、これだというミッションを探り当てることができる。次の箱からミッションが出てきます。

---

## インタビュー 2： 佐藤志保 NPO 法人 NEWVERY

---

### 一どのような価値を大切にしていますか？

現在は、大学生向け学生寮「チェルシーハウス」の運営、その他の学生寮・学生マンション等のコミュニティ運営支援に携わっています。

身の回りをちょっとでも良くしたいし、そういう行動ができる人でありたいです。「ちょっとでも良くしたい」の積み重ねで、社会は変わると思っています。学生時代に社会貢献活動という看板を背負って活動をしていてその影響があると思います。社会貢献活動は、高校までは「おえらい人」がやるイメージでしたが、やってみたら身近なサイズ感としてやれることがわかりました。こうした活動が大層に見えなくなったことが社会人になっても影響しています。

今の仕事で大事なものは、学生たちが主役だということです。最近の関心は、いかに余白を残すかということです。自分が全部握らないこと、自由度を残すバランスが大切です。この感覚には、学生時代に活動していた YEC の経験が生きています。

## 大学が自分を「人間」にしてくれた

### 一大学での学生生活は、あなたにどのような影響を与えましたか？

大学での4年間は、人間にもらった時間です。コンプレックスや、人の目や人の価値観に左右されるのではなく、自分の価値観で行動することの大切さ、目の前の人に真摯に向き合うことの大切さを教えてもらいました。誰かのために何かをすることの楽しさを味わいました。自分一人のためにご飯を作るときはそこまで美味しいものを作ろうとしないけれど、誰かといると美味しいものを作ろうとするものです。

### 一人間じゃない自分とは？

感情がなかったのかな…。あたりさわりのない話としかできませんでした。自分を開くという言葉が大学で教えてもらいました。こういう風に話すこともできなかつたと思います。内面的なこととかを話せるようになりました。

### 一入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

東京のオフィス街を、ハイヒールでカツカツと歩くキャリアウーマンをイメージしていました。キャリア概論の授業で様々な社会人に会うことで、選択肢や仕事の種類の多さ、生き方の自由さを自分が知らなかったことに気づきました。

キャリア概論以外では、津富研究室を中心に会った人も参考になりました。NPO に行くと思いきや民間の IT にも行く人もいるし、大学院へ行く人、卒業が遅れる人、青年海外協力隊に行く人。先輩たちが自由だったので、それが途方もなくて自分自身が悩むこともありました。

## 一社目で自分は好きなことを仕事にする方がいいことに気づいた。

### 一その後に就いた仕事には、どのような経緯で就きましたか。その際にどのようなことを大切にしていましたか？

就職活動そのものが面倒くさすぎて、どうでも良くなってしまって、諦めてしまった感があります。10社くらい受けましたが、自分が働いているイメージがつかないでした。血迷って IT 系商社へ就職しました。好きなことを仕事にすることを恐れていました。好きなことはデザインや学生時

代のやっていたことなどです。それを仕事にしたときに未熟さを突きつけられるのが怖かったのかもしれない。

仕事の内容は営業事務で、成約案件の書類手続きのサポート。いわゆるブラック企業で、罵声は当たり前でした。ある日、いつも通り11時くらいにカタカタと普通に仕事をしていたら、「なんでこんな仕事をしているのだろう」と涙がツーッと流れていました。自分でもきっかけは不明でした。体調が悪くなって帰宅をして母に電話をしました。最初は理由がわからなかったですが、徐々に積み重なっていたことに気づきました。翌日に来月末で辞めさせてくださいと上司に相談をしました。

この会社で働いた結果、自分は好きなことを仕事にする方がいいことに気づきました。

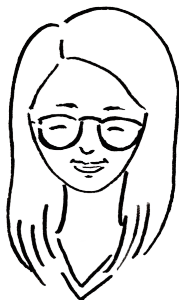
### 一退職後はどうしましたか？

その後、広告制作会社の営業職に転職しました。営業職を選んだのは、作り手は自分には向かないと感じたからです。働き始めて、前の仕事と比べて頑張ることがあまり苦ではないというか、生活の一部として自然に働けることに気づきました。デザインはもともと興味があって、モチベーションに無理がない状態でした。

ですが、学生時代にやりたかった若者支援もやりたかったので再転職し、NEWVERYに移りました。NEWVERYは学生時代から知っていましたが、ここへ移ったのは、いろんなタイミングが重なったからです。

### 一静岡県立大学で過ごしたことは、今の自分や今の仕事にどのようにつながっていますか？

すべてがつながっていると言っても過言ではないです。当時は点にしか見えなかったことが、やがて線になり、今は面になろうとしているように思います。それらを結びつけて、再編集できるのは、自分しかいません。大学で出会った人から、職業選択や性格の面で影響を受けました。県大では、本音で話してくれる人が多かったですが、それも、大学で活動していたからだと思います。職業選択にNPOが入っていることがまさにそうです。



## 在学生へのメッセージ

### 人生のネタバレを楽しみにしよう

いい友だちを作って欲しいです。利害関係のない友だちを作るほぼ最後の機会が今。それが貴重です。家族に関しては決めるのは親ではなく、決めるのは自分。プロセスはどうかであれ、自分で決めることが大事です。人生は「あの時のこれ」がどんな影響を今に与えているのかが、後でネタバレとして見つけられることが面白いです。「これをやるのに、何の意味があるのか分からない」と相談して来る人がいるけども、役に立つかどうかは今すぐわからない。やりたいんだったらとことんやればいいのです。



---

## インタビュー 3： 鈴木平 NPO 法人 TEDIC

---

### —どのような価値を大切にしていますか？

若い人と関わる機会が多く、子どもも含めて若者には可能性があると思っています。エンパワメント、引き伸ばすことが大事だと思っています。それをできる人は多くはありません。自分自身が学生時代に先輩や先生からお世話になったし、それをしたいのです。自分の属するコミュニティの人を大切にしたいです。学生も自分の家族と思って接しています。「つなぎ役」「ひとりボランティアセンター」のごとく、地域の困りごとと若者をつなぐことに日々奔走しています。

### 団体には「社会的使命」があることを知った

#### —大学での学生生活は、あなたにどのような影響を与えましたか？

大学の5年間で今の基盤になっています。人と経験と活動に尽きる学生生活でした。大学2年生当時参加していたボランティアサークルの活動について「これでは何も変わらない」「自己満足だ」と思っていました。そんなとき、学生サークルの合同研修合宿に参加して、団体には「社会的使命」があり、そのためにもやるんだということを知り、衝撃を受けました。夜のワークショップで、サークルの先輩と大ゲンカし、合宿の講師のNPO法人BrainHumanityの能島裕介さんに相談をし、そこで初めて名刺をもらいました。その縁は今でも続いています。

自分はずっと、教師いじめをするようなくらいに大人が大嫌いでしたが、信じられるようになったきっかけをくれたのは、津富教授でした。環境サークルCO-COの活動で、学外の環境NPOの講師の方に迷惑をしたことがあり、そのときに津富教授が事務所まで車を出して一緒に頭を下げにきてくれたのでした。謝らない大人が嫌だった自分にとって、自分のしでかしたミスなのに「ケツ」を持ってくれたことに感銘しました。

遊びを教えてくれた先輩も同じように、他人に迷惑をかけたときには代わりに謝ってくれました。「真面目な人が真面目にやっているだけでは意味がない」とサークル活動に対しても真摯に向き合ってくれたのも、その(普段は不真面目な)先輩でした。

#### —入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

卒業後もこういう世界(NPOとか)で働こうと思っていました。しかし、ビジネスとしては成り立たない弱い業界というイメージがあったので、一度、企業で働いたほうがいいと思い、裁量があって成長ができそうな会社を志望し、インターンシップを経て、株式会社ワークスアプリケーションに就職しました。

### 3.11のあの日に何もできなかった後悔

#### —後に就いた仕事には、どのような経緯で就きましたか？その際にどのようなことを大切にしましたか？

就職1年目の冬に、次の職場となる東北の子どもの貧困問題に取り組むNPOの代表と一緒にやらないかと誘われました。転職希望を上司に伝えると、今のまま転職しても戦力にならないぞと言われて納得したので、戦力になるまで、最初の会社を続けることにしました。それから3年が経ちました。当時は「子どもの貧困」という社会問題自体を知りませんでした。しかし、3.11のあの日に何もできなかった後悔があり、東北に何かをしたい想いがありました。

東北に転職をして、震災の影響や経済的な課題だけでなく、子どもが様々な課題を抱えていることを知りました。NPOの活動の仲間として、多くの東北の学生たちにも会えました。素直でいい子たち

だけど、身近に「ロールモデル」が少ないと感じ、自分が「ロールモデル」になれたらいいなと思いました。東北の学生たちは自身も被災しているのに、NPO でこのような活動をしていて尊敬しています。人として自分の年下の子を尊敬したのは初めてでした。

## 自分自身、本音で話すことに飢えていた

—仕事を選ぶ上で大切にしたいことは何ですか？また仕事をする上で大切にしていることは何ですか？

昔から後輩が好きで、面倒をみるのが好きでした。YEC の活動をしていく中で、今後の社会を作るのは若い人であるという意識が出てきました。自分はいわゆる「意識高い系」の「できる人間」だと思っていましたが、自分にできることはそんなに多くなく、多くの人と一緒にやったほうができることが大きいことに気づいたのが、大学生生活が終わる頃でした。

仕事では、かかわる人が何を求めているのかを意識しています。発言や動き、呑んだりする様子を見えています。活動を「辞めたい」という裏には色々な感情があります。いかに本音を引き出せるか。その方法は色々あります。聞くのに徹するときもある。タバコに連れ出すとかもそうです。「相談にのってほしい」場合も、話を聞いてほしい場合も、何かを言ってほしい場合もあります。

こういうコミュニケーションをするようになった理由は、自分自身、本音で話すことに飢えていたからかもしれません。小学校、中学校のときに「謝らない」大人が嫌いで、人としてかかわっていない教師と生徒の関係が嫌でした。一方で、サッカーのコーチ、隣のクラスの担任、クラブチームのコーチは、しっかり向き合って怒ってくれました。自分が思っていることを代弁してくれる人に救われました。



### 在学生へのメッセージ

#### —一生懸命やっていると、自然に人につながります。

大学時代は一番楽しいときです。バイトでも恋愛でもサークルでも何でもいから、時間を忘れて、のめり込んで没頭してほしいです。「何に」没頭できるかわからないかもしれないけど、わからないうちは全部やってみればいいです。やってみれば気づく瞬間は来ます。やっていると色々な人と出会います。高校までに会える人は限られていて、大学になると一気に広がります。人と出会おうと思ったら、一生懸命やっていると自然に人につながります。適当にやっていると出会わないものです。一所懸命に続けるといつか「ピッ！」となる瞬間があります。

あと、ちっちゃくても、なんでもいいので誰かのために一生懸命になるといいです。家族でも友達でも、社会でもいい。「ありがとう」と言われて、「やってよかった！」となったら自信になります。一人で勉強をしてもリアクションはないけど、誰かに何かをしたらリアクションがあります。誰でもそれはできます。自信がない人が多いけれど、自分ができると思っているし、できると信じています。

没頭する、そして、自分以外の誰かのためになることをやるといいことがあります。

---

## インタビュー４： 田野夏子 一般社団法人キャリアブリッジ

---

### 一どのような価値を大切にしていますか？

人が好き。それに尽きます。自分なんてちっぽけな市民の一人にすぎないです。仕事なんて暇潰しに過ぎません。

### 一大学での学生生活は、あなたにどのような影響を与えましたか？

大学に入ってからの影響は、大きかったです。大切にしてきたことと、してきたことが間違いじゃなかったということに気づかせてくれました。

サークルでの日々が今につながっています。汚いこともあれば、嫌われることもある。県大のサークルの活動内で起きていたことと同じです。パワハラの人もいるし、そういう人もサークル活動の中でもいた。そんな風に重ね合わせています。

### 一入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

環境サークル CO-CO に所属していました。竹林整備の活動を地域ですべて、最初は単に竹を切れば良いと思っていましたが、あるときから地域の方に「消防団に入ってくれ」と誘われるようになりました。また、学生向けのワークキャンプの初日に、地域のコーディネーター役の方からいきなり「画伯の絵を観に行かないか」と仏画を描いている方のお宅にお邪魔する展開もありました。地域の方々大切にしている祭りや太鼓、日々のご近所付き合い、暮らしに触れていく中で、自然とは何か、人とは何か、答えの無い大切な問いをもらいました。サークルのミッションにある「人と自然が共生している社会を目指す」って簡単なもんじゃないなと己の浅はかさに気づかされました。

その地域は、都市化による人口減で、放置竹林問題が発生していました。竹は生物多様性がなく、根が浅くて水も蓄えることができない植物です。地滑りが起きやすいので、災害も起きやすい。それを解決しようと等身大で活動をしていたおじいちゃんたちを見てきたことが、今の私にとって大きな影響を与えています。

## 「ここは寂しいところだよ」

### 一その後に就いた仕事には、どのような経緯で就きましたか？その際にどのようなことを大切にしていましたか？

ポツリと「ここは寂しいところだよ」とあるおじいちゃんが話していたことが胸に刺さっていました。地域の衰退に対抗はできないけれど、おじいちゃんの話してくれる「風景」が消えるのは寂しいと感じていました。この地域で何かを興せないかと、地域おこしのための起業の勉強なども始めました。

大学を卒業後、和歌山にある「麦の郷」という社会福祉法人の施設で居候で勉強させてもらい、そのままそこで働かせてもらいました。精神・身体・知的の障害すべてを対象にしており、「ほっとけやん(=ほっておけない)」というモットーで施設の運営がされていました。

これまで障害を持っている人に会ったことがなかったので、目の当たりになって、勝手に泣いたりしていました。障がいを持っている子どものお父さんが辛い思いをしているという話を聞いたとき、辛かったことも覚えています。なんでこんな思いをして生きる人がいるのだろうと感情が揺さぶられることが多かったです。その後、その法人の理事のご縁で、学生のときから知っていた大阪で若者のキャリア支援を行なっている一般社団法人キャリアブリッジに転職をしました。

### 一仕事を選ぶ上で大切にしたいことは何ですか？

支援者とかカウンセラーとかの役を背負いたくないです。支援する側、される側という立場が反転することもあります。支援者とかじゃなくて「田野さん」でいたいのもかもしれません。一人の人間ができる範囲でいいんです。社会問題の解決に「携わる」くらいでいいんです。今でも起業はしたいと思っていて、何かの社長や工場長とかになって、職場体験を受け入れたり雇ったり、孤独な子の親代わりになりたいという気持ちがあります。駄菓子屋のおばさんとかになるのが理想です。

自分も地域の普通の住民として暮らして話して、なんの所属もなしに、何者でもなく、資格にもとられずに生きていきたいです。駆け込み寺みたいに、家出した子ども、シングルマザーの子どもでも誰でもいいからこられる、なんちゃら荘の寮長とかもいいですね。

### 一仕事をする上で大切にしていることは何ですか？

やりがいは、人が人らしく生きていること。和歌山出身の南方熊楠が好き。ナウシカも好きです。考え方がすごい好きです。なんの助成金も受けずに家を借りて人を住ませているおばちゃんとか、小さい工場を構えて人を雇っている人とかに会うと、若者就労支援の事務所にこもってキャリア支援とかするよりもいい気がするのです。その場に生きているという気がします。

### 一これまでの自分の生き方をふりかえって、どう思いますか？

自分の考えを持つ、シェアする、仲間を作るというのは、大学のサークルで初めて知った感覚です。こんなに自分はモノを言ったり怒ったりするんだという発見を大学に行ってからしました。ガラッと変わりました。同期で色々活動を熱心に行っている人が多かったです。学生サークルの活動だけをするわけでもなく、それぞれ自分の楽しみも持っていました。多様性を肌で実感していました。

喧嘩をしても関係性を修復できました。「嫌われるからこれ言わないでおこう」とか、そんなことを考えることなく、「これがいいんだ！」と言えるような関係が築けたことは大きいです。そうやって人への興味が自分にあることに気づきました。ただただ竹を切るだけではなくて、そこで暮らしている人のことを思うようになりました。人が好きなことに気づけたのは、よかったと思っています。



## 在学生へのメッセージ

### レジリエンスを肌で感じて欲しい

自分の考えを表現できる、同時に、関係性が戻らなくても人は繋がっていきけるし生きていける。この二つをすり合わせながら、純粋に「生きる」ってことを、学生のときなら考えられます。働きながらであっても深く考えることはできますが、ひたすら生きることってなんだろうって考えることができたのは学生のときだけです。

サークル活動では、コストとか考えないで、夜通しミーティングをしていました。誰も妥協していませんでした。「本質ってなんだろう」と考えて損はないです。「どうぞ考えてください」と言いたいです。それを肌感覚で感じて欲しい。レジリエンスという言葉だけでは言い切れないかもしれませんが、「生きていく上でのしなやかさ」という意味ではそうかもしれません。

---

## インタビュー 5： 渡辺真子 NPO 法人 HELLOlife

---

施策マネジメント室プログラム開発ディレクター

### —どの様な価値を大切に仕事をしていますか？

人生のなかで苦労や困難と出会ったときに、その状況を変えていけたり、乗り越えていけたり、立ち直れたりすることは重要だし、そのプロセスが素晴らしいと思っています。自分自身の困難も、家族の困難も、地域や社会の困難も、無力さに立ち尽くすのではなく、仲間との出会いと知恵があれば変えていける、乗り越えていけるものだと考えています。

### なぜ国際 NGO 志望が若者の就労支援へ？

#### —入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

大学に進学するときは、国際 NGO で働きたいと思っていました。進学した当時から国際協力をしたいたいという思いが強かったので、入学してすぐに国際協力サークルに入り活動をはじめました。サークル活動をしていなければ今の自分はいないと思うほど、自分の基礎を作るような学生生活でした。

大学2年生の春に初めてニート・ひきこもりを支援する若者のボランティアをやりました。自分と同じ世代の人のことを考えて、若者の死因の一位が自殺であることが腑に落ちました。途上国に限らず、どこに暮らしていても人生に希望を持てなくなったとき、絶望を感じたときには自ら死を選ぶこともあるのだということに気づきました。

自分が根を張ったほうがいいのは日本だし、自分を含め身近な人や大切な人、自分と同じ世代の人が希望を持って生きていけるようにしていくためにできることは何なのかと考えたことで、自分自身もそうである「若者」という世代への支援の現場に興味を抱くようになりました。日本でそういう仕事って何かを相談したら、関西で就労支援をしている知り合いの方にお誘いいただきました。3年生の後期で休学をして、大阪の豊中の一般社団法人キャリアブリッジでインターンをすることになりました。

インターン中には、若者支援の現場にヒアリングをして、若者支援ガイドマップとウェブサイトを作りました。その当時、私が見た若者への支援サービスはあまりにごく一部の方にしか届いておらず、「本当に若者のための取り組みなのだろうか」と違和感を抱きました。そんななか、津富教授から紹介された NPO 法人 HELLOlife は、若者の声から理想のハローワークを生み出すという取り組みをしており、若者の声に寄り添い、個々の若者を支援してだけでなく、新たな仕組みやシステムを社会のなかで作っていく法人だと知りました。「まさにそういうことをしたい」と考えて志望しました。

### 「死んだ魚の眼」をしていた

#### —仕事を選ぶ上で大切にされたことは何ですか。また仕事をする上で大切にしていることは何ですか？

人がより良く生きていくことに貢献できるかどうか、そして社会のなかで新しい仕組みとなるようなものが創れる環境であるかどうかです。対個人と対社会の両方ができることが大事で、若者というこだわりはないかもしれませんが、仕事をするうえで大切にしていることは、「自分や自分たちがしていることは本当に意味のあることなのかどうか」と、客観的に、時には批判的に問い続けることです。

高校生の時、「生きている意味はない」と思っていました。その時に自分は一度死んでいますね。支えがなくなった感じです。家庭環境が悪くて基本的に怒られていたので、自尊心が低かったって

いうのもありました。そういうこともあり、なかなか人を信じることができなかつたりしました。

中学のときは評価されるものとして勉強やテニスがあったのですが、それが高校になってなくなってしまい、周りの期待に応えていたものがなくなってしまったときにアイデンティティが揺らいでしまいました。良い大学に行かないといい仕事に就けないというのが周りでは当たり前になっていました。良い大学に行けない自分の人生は終わったと思いました。一度歩もうとしていた人生から外れたと思いました。そこが出発点で、「何のために生きるか」と考え始めたことが、今につながっている気がします。

## 初めて人として認めてくれた先輩

自分自身を信じることができなかった経験があります。本当に根暗で、「死んだ魚の眼」をしていたと思います。自分を認めてもらう経験ってあまりなかったです。最初に自分のアイデアを認めてくれたのが大学のサークルの NGO あおいの先輩でした。「マコはあおいが考えるべきことを考えてくれる人だ」とメモを書いて渡してくれて、初めて人に認められたと感じました。そうやって人は認め合えるのだなと思いました。

それまでは、発言しても「そうだよ〜」で流されることが多かったのですが、この先輩は、自分の考え方や存在を認めてくれて「力があるんだよ」と期待してくれたのです。他の先輩からも「マコいいよ!」といわれて。このあたりから自信がついてきて、人を信じられるようになりました。なので、わたし自身も人の力を信じていきたいし、お互いに信じられる仲間との出会いの場をつくっていきたいと思っています。



## 在学生へのメッセージ

### 下に降りていけばいくほど他者と出会える

自分たちの人生について、自分たちの社会について、たくさん語り合える仲間がきっと大学生活を通じて見つかると思います。考える力だったり、行動する力だったり、協力しあう力だったり、私たちにはたくさんの力があるので、その力を活かして、たくさんの「他者」と出会ってほしいと思います。そして、その出会いの中から、自分たちにできることや純粋にやりたいと思えることを見つけていってほしいと思います。

今の職場の「創造性」をいいなと思っています。ただし、創造性を何に使うかは考えなくてはいけません。創造性は手法、手段に過ぎないのです。

大学時代には、目的の部分を探ることができません。学生時代には、誰にも邪魔をされることなく、思う存分できます。そのためには、「上ばかりを見ないでほしい」です。下に降りていけばいくほど、他者と出会えると思います。目的は、他者との出会いを通じて深まっていくと思うので、そこで出会う他者というのが今までの自分の人生の中で出会えないような人たちであるほど、豊かになっていきます。

## インタビュー6： 若林勇太(公財)さっぽろ青少年女性活動協会

### 一どのような価値を大切にしていますか？

分断社会において、自分が手の届く範囲でかかわっている人たちと、社会との関係を紡ぎ直す役割をしていると思っています。私の仕事は、委託事業や指定管理業務がメインで、これらの仕事は、社会状況の変化に大きく影響を受けます。そこで、社会状況の変化を常に注視し、関係機関へのアドボカシーをしながら、より良い社会づくりに貢献していくことを大切にしています。

自分は大きい仕事が好きで、「ゼロからイチ」を作るのが好きです。大切にしていることは、ミクロとマクロを往復することです。現場だけだと疲弊してしまうし、アドボカシーだけでも地に足がつかないです。実践と理論といってもいいと思います。

### 社会貢献系のサークルに興味はなかった

#### 一大学での学生生活は、あなたにどのような影響を与えましたか？

静岡県立大学で過ごし、教授や仲間との出会い、中高生との出会い、今の上司となる方との出会い、ユースワークとの出会い、さまざまな出会いとそれらの出会いを通じた発見が、偶然の結果として、私を今の仕事に導いてくれたと思っています。

#### 一入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

「英語が得意だし、国際関係学部が良いかな」程度の適度な志望理由で進学をしました。勉強はかなり頑張りました。周りからは「国公立大学に行くなんてえらい！」なんてことも言われ、私も「国公立に進学したのだから、将来は安泰だな」なんて浅はかなことを考えていました。大学1年生の時は、地元の友達と朝までボウリングをしていました。普通に授業に出てアルバイトをして、実家の飯を食べて。何も考えていませんでした。よく彼女と遊んでいました。社会貢献系のサークルには興味がありませんでした。

### 「勇太！男は給料の高い仕事についてなんぼやで！」

#### 一どのような経緯でサークル活動にかかわるようになったのですか？

国際関係学部の卒業生と交流できる会に友人に誘われていきました。その中で、40代のOBの方に「君は、将来何がやりたいのかい」と聞かれ、サッカーが好きだったので、「スカパー(サッカーの衛星放送をやっている会社)に就職したいです」と答えました。そしたら「地に足がついていない」「学生時代、もっと頑張ったほうがいいよ」といわれたのです。当時何もしていなくて、語れるエピソードがなかったのが悔しかったことを覚えています。その後、誘ってもらって YEC のミーティングに行くようになりました。

活動を始めて、ともに活動をした仲間、かかわった中高生たち、お世話になった教授、対人援助職に携わる大人たちなど、さまざまな方々と出会って影響を受けながら、ソーシャルな領域での仕事や対人援助職への興味・関心が芽生えてきました。

親はコテコテの関西人で、「勇太！男は給料の高い仕事についてなんぼやで！」みたいな考え方で、私は親の価値観に強い影響を受けていました。しかし、出会いを通して、さまざまな価値観に揺さぶられながら、親の価値観を相対化して、親の影響から自由になり、自己のアイデンティティを徐々に形成していくことができました。自立するには、親の影響を下げるのが重要というのが、支援

業界の常識なのですが、私は、高校までは、経済的にも思想的にも親からの影響を受けずに自立していくという道筋がありませんでした。

国際関係学部という学部で「Think Globally, Act Locally(地球規模で考え、足元から行動せよ)」の精神が養われていきました。今の職場で英語文献を読む人は自分くらいで珍しがられます。

## Want から Must への変化

### —入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

入学した時点では、例えば銀行や商社など、一般的に良いと思われる地元の企業に就職するのだろうと思っていました。YEC での活動を始めてから、徐々に進路に対する考えが変化を始めた。最初は「ユースワークを仕事にしたらおもしろそう」くらいの、want(やりたい)的な感覚でした。

それまでは何もできないという劣等感があったのですが、YEC の活動で中高生とかかわる中で、中高生から人気になっちゃうこととか、掘みがうまいことが自分の強みとして自覚できるようになりました。イギリスにユースワークを学びに留学をすると決め、仲間と勉学に励んでいた頃には「ユースワークを仕事にすることは、自分が神様から与えられたミッションなのだ！」と大きな勘違いをし始めており、want から must へと変化していきました。

帰国後、若者支援の業界への就職活動はあまりうまくいかず、一般就職も考えた時期もありましたが、仲間が対人援助の領域に就職する中で「仲間たちに対して、自分だけ一般就職という裏切り行為をするわけにはいかない！」という謎な責任感があり、ユースワーク業界にこだわって就職活動をしていました。

海外生活で学んだことや感じたことを twitter を使いあれこれと発信をしていたところ、今の法人の上司となる松田考さん(札幌市若者支援総合センター)の目に止まり、お声がけをいただきました。そして自身のこれまでの経験とドンピシャであるという理由と、他者から求められているという喜びもあり、札幌行きを決断しました。



### 在学生へのメッセージ

#### 脳内を邪魔してくる「あいつ」を作ろう

大切にしてほしいのは、「寄り道力」です。少しでも興味や気になることがあったら、寄り道気分で飛び込んでみよう。飛び込んだ中で「これ良いかも！」というものがあたら、しばらく続けてみよう。続けてみることで感じたことや学んだことがあたら、恥ずかしいかもしれないけどちょっと発信してみよう。そうすると、最初は寄り道気分だったのに、いつの間にか自分のキャリアが形成されていたり(いなかったり)します。あとは、脳内を邪魔してくる、仲間の存在を作った方が良いと思います。「あいつならどう言うかな」「どう考えるのかな」という仲間を学生時代に作ることは、一生の財産になります。



---

## インタビュー 7： 湯浅雄偉 NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター

---

### —どの様な価値を大切に仕事をしていますか？

人の尊厳・権利を当たり前大切にすることが一番大事だと思っています。私は、手抜きや誠実さのない態度、人を簡単に論評する態度が、誰かの生きていく権利をさらに奪い、社会や他人を信じる力を歪めてしまうことをひしひしと感じる現場で働いています。私たちは誰もが人を傷つけ差別する。その構造の中で生きています。だからこそ、自分に対しては、個人を傷つけるような言動から自分を大切に、一方、他者に対しては、それぞれがもっている繊細さや力を信じて、最初に肯定することが大切だと思っています。それができないと、人の痛みや傷つきに繊細になれません。困っているというのはその人の問題ではなくて、社会構造の中で困りごとが凝集しているから、「困っている人」になっているんです。実際にはパワーがある人たちで、地域に変化が起きるときにカギとなる人たちです。「困っている人」は困る状況に陥らされていて、その人自身がいま活かされていないだけだと考えています。

### —入学した時点での卒業後の進路は、在学中にどのように変化しましたか？

外交官になりたいとある国立大の受験に挑戦していましたが、センターで得点が足りず静岡県立大学に来ました。当初は大学には期待感がありませんでした。私の中で大きな影響を与えてくれたのは DreamSeeds というキャリア支援サークルの先輩たちとの出会いと、青少年就労支援ネットワーク静岡のボランティアへの参加でした。支援の対象であるニート・ひきこもりの若者たちと自分自身が「何も変わらない」ということにびっくりしました。笑うのが苦手なことがそっくりでした。参加者の若者たちと真剣に向き合う先輩たちの迫力に気押されました。楽しく真剣に誠実に、生き生きと取り組む輪の中に入りたい、先輩たちに少しでも近づきたいという気持ちもありました。

## 純粋な人たちの中に不純な自分がある

### —学生生活をどんな気持ちで過ごしていましたか？

1年生の頃は「認められたい」という気持ちに絡め取られていました。活動を素直にすればいいのに、自分が認められたいという気持ちがゴールでした。自分も相手も認められない状態になり、ボランティアをしていることが居心地がいいとは思えなくなりました。純粋な人たちの中に不純な自分があるという気づきでした。自分自身の生き方と社会のなかでどんなふう生きていくのか、おぼろげながら理解できたきっかけとなったのは、DreamSeeds の取り組みで地に足を着けて仕事をしている社会人と企画をさせてもらったことでした。その後、大学2年生の時に社会人の方から紹介していただいた介護の現場でインターンシップをして、社長のカバン持ちをしました。そんな社会人をみていたら、自分のあるがままと社会のつながりがより一層感じられる場で働きたいと思い、「外交官」を目指す必然性は失われていきました。

なんとなく大学を卒業するのが惜しくなり、いろんな学生にとってもこうした経験をする機会が開かれたらいいなと思い、自分ももっと常道から外れてみるためにインターンをする事にしました。京都のある中間支援 NPO のインターンの最終面接のとき、「きみは何をしてきたの」と問われて、中学時代のブラック部活のこと、仲良くしたくもない先輩や同級生と周りに合わせて笑っていたらなぜか涙が出てきたこと、学校をよく休んでいたけど開き直れなかったなどの、思い出話をしていたら、自然に涙が出てきました。中学時代は、大人目線の、教師—先輩ヒエラルキーはありがた迷惑ばかりで、しんどかったことを思い出しました。今でも、おべっかを言うと涙が出てきます。

## 言語と身体の不一致が起きていた。

### —結局、何に気付いていったのですか？

この面接の時、私は「自由に中高生が自分自身で生き方をデザインしたり、社会との関係を学んだりする場をつくりたい」と口走っていました。本当は若者支援という言葉自体が偉そうで嫌いで「この団体は合っていない」と思っているにもかかわらず、面接で自分から言えず、適応してしまいました。認められることを優先し、自分自身を大事にできず、言語と身体の不一致が起きていました。今思えば、頭に浮かんでいた中高生時代の「自分自身を大事にしろ！素直になれ！」という「声なき声」を大切にすべきだったかもしれません。

結果的に、このNPOの人に「うちは違うんじゃないの？」と声をかけてもらい、4年次に休学して、シチズンシップ共育企画という団体でインターンを始めました。このインターンでの1年間で「聞くこと、問いかけること、同じスタンスに立つことで人をカブける」というのを体験的に学びました。復学してからはユースワークが盛んなフィンランドに視察にいきました。そこで大事にされていたのは、若者の声を聞くことでした。若者が社会の主体で市民である、若者には声を聞かれる権利があるということが印象深かったです。

卒業の頃に、自分たちがいかに見栄を張っているかをみんなで解き明かす「見栄の張り方ワークショップ」を主宰しました。自分自身の確からしさを支援活動に求めてしまったり、それがゆえに見栄を張ってしまったりする自分を見つめ直し、自分たち若者は誰でもそういう状態になりうることを感じました。自分自身のことから始める大切さに気付きながら、さらに探求したいと思い、北海道大学の大学院に進学しました。北海道でフィールドを探しているときに、シチズンシップ共育企画時代の先輩から、月形町に遊びにいくと連絡があり、一緒に同行させてもらうことになりました。月形では福島や札幌からきた若者たちが共同生活を送りながら、地域のおじさん、おばさんたちに伴走者になってもらって大人に育っていくというプロジェクトが進行していました。月形は若者の育ちの課題と地域の課題が重なり合って、誰もが当事者になる問題として「若者支援」が見出されていました。汽車に乗ってボランティアとして通っていた自分は、少しずつ訪れる頻度を増やして行き、パート職員としてお誘いを受けることになりました。その後、大学院を卒業し正職員になりました。学部生時代からの悩みが、ちょっとずつ今の仕事を引き寄せていったように思えます。



### 在学生へのメッセージ

#### 率直な感じ方を言葉にすることを恐れない

自分自身の感受性を高めるようにして、心を開いて生活をしてほしいと思います。人に言われてムツとしたら、それに気づいたあなた自身を大切にしてほしいと思います。怒りや悲しみ、喜び、一つ一つが原体験になると思いますし、それを集団のなかで経験することがさらにいい体験になると思います。無理に集団に所属する必要はありませんが、あなたの率直な感じ方を言葉にすることを恐れずに過ごしてほしいと思います。相手の意見を聞くことに長けている人は多い気がするけど、言うことができる人が少ないと思います。言わないことを受け止めてくれる人はそういません。感受性の高い1年生の時にこそ言葉にしていってほしいです。

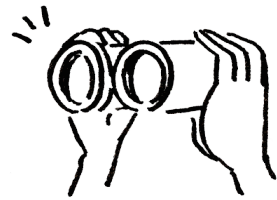
## 考えてみよう

本書をより深く理解して学びを深めるために考えたい、いくつかの問いをまとめました。読みながらマーカーを引いてみたり、冊子を読んだ人同士でこれらの問いを投げかけあったりしてディスカッションをしてみましょう。

### 問1 言葉を見つける

7人の先輩のインタビューを読みながら、あなたはどんな言葉に出会いましたか。彼らが、生きることを通じて獲得した言葉には、真実の力がこもっています。

- ・インタビューの中であなたの心にひっかかった言葉やキーワードは何ですか。
- ・なぜその言葉やキーワードがひっかかったのですか。



### 問2 大切なものを手に入れる

7人の先輩も、この県大のキャンパスで学びました。彼らは、学生生活を通じて、徐々に変化し、「大切な価値観」を手に入れました。

- ・7人の先輩は、どんな学生生活を通じて、どのように変化しましたか。
- ・7人の先輩は、学生生活を通じて、どんな価値観を手に入れたのでしょうか。



### 問3 自分に問いながら生きる

日々の学生生活が、あなた自身を形づくっています。学生生活において、どんな問いを持つかで、自分の人生の質や方向性が決まってきます。

- ・あなたは、何を自分に問いながら、どんな学生生活を送りますか。
- ・あなたは、何を大切に、これから生きていこうと思いますか。



## “ インタビューを終えて 想いを持って生きることのしなやかさ ”

私も、彼ら・彼女らとかつてサークル活動をともにし、国際関係学部を卒業した。話を聴きながら、あの時にこんなことを考えていたのかと驚き、あの時から変わらない無垢な「想い」と、対人支援の現場で抱える「葛藤」に悩む様子を知ることができた。

人と向き合う活動ほど、自らの生き方やあり方が問われる活動はない。真剣に人と向き合う姿勢が、そのまま自らと向き合う姿勢となり、この自他の境界の往来が、その人の進路をしなやかなものとする。

彼らは、自分にこんなことを問いかけながら生きてきたのだろう。

- ・自分は、どのような価値を大切に人とかかわってくるのか。
- ・自分は、日々、何を大切にしておけばよいのか。
- ・自分は、何を軸にして生きていくのか。

あなたは何を自分に問うだろうか。

(両角達平)



- 
- |           |   |
|-----------|---|
| ■ 謝辞      | 本研究実施にあたり、インタビューのご協力をいただいた皆様に心より感謝いたします。  |
| ■ 研究チーム   | 津富宏(静岡県立大学)・両角達平(文教大学)  |
| ■ 構成・デザイン | 磯村拓也  |
| ■ 連絡先     | 静岡県立大学津富研究室<br>住所：〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1<br>E-mail：tsutomi@u-shizuoka-ken.ac.jp |
| ■ 発行      | 平成 31 年 3 月 31 日  |

本研究は、静岡県立大学平成 30 年度教員特別研究「静岡県立大学を卒業した対人支援者のキャリアとその原点：対人支援者のふ卵器としての地方大学」による助成を受けて実施しました。